

川
の
雅
証
物

麻生路郎★編輯

大正十三年三月三日發售(郵便物認可)

昭和十二年三月一日發行

第十四卷第三號(每月一回一日發行)

NO. III VOL. XIV

川柳
句集

街の推る

不朽洞版

★ 作家生活十三年、黙々として吐き出した著者そのままの生き
た姿、一讀再讀人生の底邊に觸るゝものあらん。敢て薦む。

序生先郎路生麻
著雨緑本橋

錢四料送 錢〇五價定

洞朽不

三通本出玉區成西市阪大
二九三〇三阪大座口替振

所行發

誌 雜 柳 川

號 三 第 卷 四 十 第



街 に 住 め ば

ビルの窓誰を呼んでるのでなし
 馬力来て馬のお腹なかとなる出口
 インチキが素ツ破ぬかれた街の角
 パーラーの盤なき對話見ゆる舗道みち
 サイレンの正午があとやさきに鳴り
 アパートへ正方形の夜が明ける
 路 耶
 蔑 乃
 鮎 美
 亂 耽
 豆 秋
 おさむ



川柳雜誌 三月號目次

題字・路郎筆

文苑

川柳名句評釋……………麻生路郎…(四)

武玉川三編研究(三)……………梅本秋の屋
森東魚二魚…(二)

春寒 爐邊……………森東魚…(三)

「武玉川三編研究」を讀む……………穎原退藏…(六)

「六厘坊十句」の再檢討(六)……………木村半文錢…(五)

鰻を食つたが生きてゐる……………西田艸樂…(三)

嘘 實……………中西おさむ…(六)

漫書セク
シヨ
ン
就職珍戰術
オサカ・マンガ・トリオ
小川 幹 武夫…(三四)
北川 幹 武夫…(三四)
樋口 ヒロム

川柳指導講座……………塚越正光…(八)

行路集(短歌)……………長野晴濱…(七)



書齋より……………麻生路郎(三)

柳友觀月に……………水谷鮎美(四)

殘燭作家の辯……………桑原京郎(四)

川・協・の・頁……………(七)

川・柳・横・町……………不死鳥(四)

創作

川柳塔……………麻生路郎選(二)

近作柳樽……………麻生路郎選(六)

街に住めば(句)……………諸家(一)

日本名所名物川柳(京都の巻)……………山川紫明選(三)

一路集 女將……………朝賀大鱗畫(三)

窓口……………麻生葭乃選(三八)

各地柳壇……………森雞牛子(三九)

柳界展望……………社關係の人々(四九)

川・雜・案・内……………編輯縱横(四〇)



川柳名句評釋

(8)

麻生路郎

この邊へ洋服箆笥置けばよし

百雷

月給は食ふてチョンである。ウツカリすると赤字である。サラリーマン生活に入つて既に三年、洋服箆笥、洋服箆笥の夢は果てしなく續くのである。

人の非を發いて淋し佛の日

蒼梧樓

人間としての弱さは誰ももつてゐる。人の非をあばいて自分の非を悟らぬ俗物の多い世の中で、自分の小さく、自分の弱さをしみぐと知ることはいふことである。

嚏をまごもにうけた梅の花

大門

寒からうと寒くなからうと、咲くべく咲いたまでである

それが風流か風流でないか梅の花の知つたことではない。人間の愚かさは「オイ風邪をひいては駄目だぜ」と梅から注意されさうである。

知つてるかアハ、ご手品やめにする

紋太

自分自身が世間に疎いことを知らぬ人物を主材にしてゐるだけに、いよゝユーモラスな句となつてゐる。

冬の農家を平和ごなづけたる寫眞

有爲郎

炎天下の草取、とりいれの多忙、非常時の農村の喘ぎ、そんな姿をこの一葉の寫眞からは見ることが出来なくて、平和の二字に片づけられてゐるのである。靜中動を想はされる句である。

ごここに行く船か濛々西さして

普 天

人生は不可解である。ボンヤリと船を眺めてゐれば我も又どこへ行く身か。

卒業の日に友達の國をき

金 一郎

學びの窓に机を並べてゐた人たちへチリ／＼バラ／＼になる日が遂に來た。卒業はうれしいが別れは悲しい。お互ひはすくなくらずセンチにならざるを得なかつた。

浴槽へずらり立つたは皆わが子

葎 乃

何ンとかチャンに何ンとかチャン。シャボンの泡の幾星霜。スク／＼とのびる子等の姿へ、ホツとするのも無理はない。

貧乏の底に指輪を手離さず

新 水

キラ／＼と光る紅玉、小さくとも愛の象徴の指環、こればかりは、どんなに困つても手離したくないのが女性心理である。

患へば近所にうまいものがなし

雨 吉

「何か喰べない？」さう聞かれても、病床では食欲をそよるものが何一つない。「でも何か喰べないと、折角よくなりかけてゐるのに、早く起きられないよ」と云はれ、「では驛辨でも喰べて見やうかしら」といふところか。

踏切で抱けばわが子が猿に似て

山 雨 樓

危険がせまると子猿たちは、ひたぶるに親のからだに纏ひつく。踏切で、ハツと思つて抱きかゝへた姿をそれに比して、滑稽に感じたのであらうか。

何様の社か旅のお朔日

玄 六

旅のこととて、何様の社か判らないが、今日はお朔日だ。なアと思つと、敬虔な感じにうたれ拜む氣にもなつたのである。

靴下を焦しスキーの歸りなり

か ぼ る

白皚々たる雪の山をのぞんで、行く時の颯爽たる姿に引きかへ、歸途のシヨンポリさが、際立つて目立つのも面白。



樽 柳 作 近

選 郎 路 生 麻



仕舞風呂一本足がとんで来る	大阪	柳大門	お國柄ハツキリ御重詰に見せ	同
散髪を出直した博突うち	同		童心に戻るコン／＼雪の唱	神戸 山田 凡樂
吊革を持たぬ虚を衝く急停車	同		炭ついで又も寒さの事にふれ	同
長靴をこかして猫の逃げのびし	同		イロハ順いつもトツプを切る名前	同
お毒味にのぞく主人を手傳はせ	朝鮮	豊島 松女	外人も通らぬ街のTEA・ROOM	同
同窓生舊姓二人だけとなり	同		二月三日化けて似合ひの髪となり	豊中 阿部 閑生
紋付を揃へてつと人心地	同		親友の手でかばはれてマッチ摺り	同



座布團のトヂに躰き母すわり

同

女將もう諦めた妓にしてしまひ

大阪 中見 光路

定命へ一步手前の面白さ

同

座蒲團を持つて箒に追れたり

同

ターキーへ行く娘 七色ほどは塗り

京都 桑原 京郎

袖袂しまだそとわをどうする氣

同

銀狐特定席がチトせまし

同

かくて如月新議事堂の上の雲

長野縣 金井有爲郎

海綿に春の光のある机

同

激情も時計に支配されてゐた

同

馬の脊にはじけた霰顔へ来る

愛媛縣 町田 垂柳

枯草の中の墓標へ跪き

同

年嵩の犬吼様が違ふなり

同

磨くまの雲を寫した洗面器

兵庫縣 林 朔 風

千貼つて九錢夫を遅刻さす

同

ワンワンへかけるしつこの手が疲れ

同

既酌をたのしみにして金を蓄め

大阪 川村 觀月

十二月車掌世相を感じたり

同

病人へ窓が明るくなつて來た

同

丸刈の社長論語を例にひき

今治 谷 心 府

白船の夕陽の中に入らんとす

同

苦勞性懷爐の上に掌をあてゝ

同

ルンペンの時事解説は酔つてゐる

大阪 畑田よし江

見飽きして座右の銘が又變り

同

出來すぎて餓は田舎の冬と居る

同

父の枕が父に似てゐる

今治 渡邊 曉童

少年の銅像に成る夢を持ち

同

アーチくぐればひらけゆく海

同

年をとる豆神様へ皆供へ

大阪 畑田 炭車

炭俵土佐の匂ひは判るまい

同

聽くはやはりチントンシヤンが好き

同 由利 孝輔

あの様に樂に死にたい父の慾

同

商賣はつらし欠伸を噛みころし

同

死んだ後惜しまれたとて 何になる

同

妹 逝



- | | | | | | |
|------------------|-----|-------|--------------------|-----|-------|
| デパートで食ふことにする女たち | 大阪 | 小鹽 靜路 | 借金も胸勘定で成る程度 | 大阪 | 庄司淡路坊 |
| 長き夜を嫁ぐ日近き娘と母と | 同 | 同 | 遮断機が上るひとミラツシユアワー | 同 | 同 |
| 寄つてたかつて結婚観をかへさせる | 同 | 同 | 出獵の三日泊りが鳩一つ | 兵庫縣 | 戸倉 普天 |
| 年賀状生れ子の名も書加へ | 同 | 今井 菊路 | 一寸手を舉げて行き交ふ登山パス | 同 | 同 |
| 新年號廣告ばかり讀ませられ | 同 | 同 | 日の丸へ今日はしづかな株屋街 | 大阪 | 山田 菊人 |
| 三ヶ日母は炬燵へ忘れられ | 同 | 同 | ステイムへのせる辨當箱あわれ | 同 | 同 |
| 手焙りの更けたなと知る人通り | 大阪 | 北山十字路 | 開店の人氣入口あけたまゝ | 名古屋 | 星野 兄兒 |
| 寢言の兒もう叱るまい叱るまい | 同 | 同 | どの窓も儲かるようにビルディング | 同 | 同 |
| くちづけて想ひは遠き落椿 | 同 | 同 | 差向ひ妓酔ひたい猪口をとり | 兵庫縣 | 高峰 柳兒 |
| 博士にも見て貰つたと諦める | 兵庫縣 | 林 幹 | ダットサンままごとじみた戀をのせ | 同 | 同 |
| 同級の一人藝者になる噂 | 同 | 同 | デパートは見ただけどんまい屋へ這入り | 神戸 | 岡田 某人 |
| 新妻の指がきれいな水仕事 | 兵庫縣 | 田邊 由布 | 金だけが頼り女の老けはじめ | 同 | 同 |
| なつかしい母のお腹を見たお風呂 | 同 | 同 | 休歸兵一年生は道をよけ | 鳥根縣 | 寺本 嵐峰 |
| 晝の風呂大きく桶をとり落し | 今治 | 月原 宵明 | 凍てつきし朝の密柑の鮮かに | 同 | 同 |
| 面白く酔はして妻も果報者 | 同 | 同 | 除隊兵ラツバの鳴らぬ朝を起き | 今治 | 石田美須賀 |
| 諦める事より知らず病み續け | 大阪 | 山本 葉光 | 雑踏に玩具持つ手を差し上げて | 同 | 同 |
| 験とすれば擴いゝ闇がある | 同 | 同 | 女給の手男たるものよく叩き | 大阪 | 石田 沐天 |



ターキートか稱し日本の女なり

同

痰壺に似て人生の隅に生き

今治 長野 文庫

月給の程度に官舎立並び

同

アルバムに娶つた友と死んだ友

大阪 秋山 古心

鈴の音に出ると號外同じもの

同

妻を叱つて氣まづい金を貰つて出

東京 村野蒼梧樓

泣寝入りしたとは見えぬ兒の寢息

同

つゝ先で射的の虎は首を振り

大阪府 米本貴志子

病弱の兒はつつましう下駄を脱ぎ

同

祝電を大きく出して趣味の會

大阪 金井 串郎

一年生歸つた聲は奥へ抜け

同

大袈裟に打たれた事を母につげ

大阪府 中村玉格子

汽車ごっこお客は末の女の子

大阪 阿萬 万的

病人の兵兒帯それも重たそう

大阪 阪本遠見路

正月のプランは變はる喫茶店

丸龜 馬場 浪二

松の内辯解せず呑めるなり

朝鮮 豊島石燈籠

基敵は相好崩して招じ入れ

大阪 須田 曉夢

案の定などと迷信裏書きし

朝鮮 高原悪源太

見くらべて子供の心迷ふなり

大阪 山口 木守

戀猫に恐れて寝たる夜泣の子

愛媛縣 町田 承春

相槌を打てば氣違はめてくれ

石川縣 勝山しんじ

日めくりを心明るく見る日なり

尼 坂井 正胤

知つた聲上れと炬燵から返事

愛媛縣 今川 椋影

人妻の哀歌と思へ子守歌

今治 曾我部尼花

唯今といふ良心をとがめられ

奈良縣 酒井美知夫

失戀が悲しい僕にしてしまひ

鳥取縣 林 小判

ゴム手袋それも姑の氣に入らず

名古屋 稻垣 正穂

大神宮様にうっかり騙られる

大阪 加藤ライト

妾して居ればの指輪よく光り

長野 中村 猪郎

我ながらあきれる無口者の戀

大阪 西畑 南天

大阪も府下に働く役者なり

今治 菊池 香方

春の陽を女中張板持つて追ひ

石川縣 松本 文太

灰皿の代りにもなる下足札

松江 勝谷山川兒

子にだけは憂目みせまい新學期

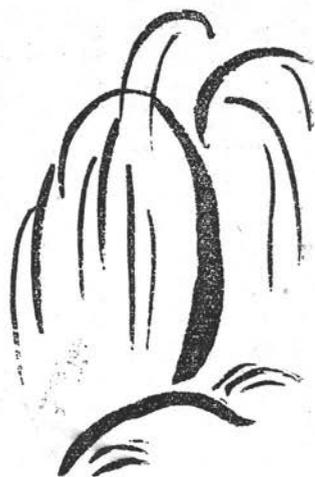
鳥取縣 原 獨 仙



失禮なみかんの汁を笑ろて拭き	今治	石手	河鹿
女房の妬いた心を嬉しがり	愛媛縣	鷺野	榮
豆まきに小鬼の方は半分食ひ	尾崎	屋代	青子
怒るだけ怒つたあとの眼のやり場	朝野	桂	閑々坊
びしよ濡れで歸れば犬に吠えつかれ	奈良縣	島田	翠峯
撥ダコを知らぬ妓指に新ダイヤ	長野縣	佐二木千隈	
算盤のはしを切り捨てまいとして	鳥取	森本法泉水	
一日も早く脊廣が來たい春	大阪	大西	洋
夜遊びを止めよと神籤凶と出る	大阪	米林	舞蝶
空つ風歡樂街の淋れ様	神戸	藤井	徒歩
否といふ事が嫌ひで利用され	島根縣	山本	勇坊
蜘蛛が巢を張つたよ妻の留守の床	尾崎	山田南濃路	
酒の味此處も日本の土地なりき	島根縣	勝部	海棠
これしきの値に算盤へ必死なり	堺	佐々木麦子	
何をする人か書齋に入つたきり	名古屋	熊澤	明央
あれだけの暮しを望むかへり道	大阪	岩橋	岩石
當然のやうに老人席へ掛け	大阪府	大阪	形水

☆

本號では朝鮮の松女さんが躍進し神戸の凡樂君が顔を出した。大門、閑生の兩君は頑張を見せてゐる。閑生君の「親友の手」での句はなんでもない見つけどころではあるが友情の美しさがハッキリ出てゐて涙さへ誘ふ句である。幾年か姿を消してゐた光路君、京郎君、炭車君、十字路君などが、昔まつた杵柄さいふ格で顔出しをした。長野の有爲郎君は塗號腕が冴えて來るので愉快だ。句品のある詩情豊かな作家として一異彩である。本號の「かくて如月」「海純に」「激情も」の三句さも秀れた作だ。二句組にも、一句組にも秀れた句がある。一句組で三句よりいい句を吐く人もあるが今一ト息精進が足りないのか粒のそろはぬ憾みがある。選句してゐて一番こまるのは粒がそろつてゐて、低位の句を作る人で、斯うした作家は句を作るのに樂々さつくり過ぎるのだと思ふ。もつと思案を深めて欲しい。(路)



武玉川三編研究 (三)

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

(31) むつ言に問いかけて見る爪の星

秋の屋「爪の星」は、俗に物着星と唱へて、爪の甲に出来る白斑で、これが出来るのは、新衣の出来る兆だといふ迷信が有つた。此の句は、遊女などが閨中に於て、嫖客に爪の星をみせて、暗に新衣をねだるといふのであるが、遊女には限らず、人妻としても能く聞える。

東 魚 〓 私等も子供の時、物着星を信じたものである。

別に爪の星を見せるのではなく、自分で充分自信がついたので、衣服を客にねだりかけて見るのであらう。

省 二 〓 物着星見せる客にはよりかゝり」は、餘りにあからさまだ。「問ひかけてみる」位が四十八手の一つでありさうだ。

(32) 砂に育て貰ふ大磯

秋の屋 〓 相州大磯の漁家の幼児等は、平素、親達の手を借りずに、砂濱に出て遊ぶ間に生長するのを、「砂に育て貰ふ」と詠んだ句と思ふ。

東 魚 〓 成程お説の如くであらう。大磯はやはり前句關係で利いてゐるのであらう。

省 二 〓 山家育ちに對して砂濱育ちなのである。「砂へ子の這ふ片瀬腰越(一技筈)かくして育つ。——大磯の句を一つ。「大磯の客は足袋から砂を出し」

(33) 吹る、たけは螺貝へ錢

省 二 〓 活字本金砂子上巻に、「法螺貝の錢」とあるが如何。螺貝で錢を受ける。

秋の屋 法螺貝は、修験者の用具ともなり、また、でろれん祭文語りも、之れを用ひた。されば此の句は祭文語りを詠んだもの歟。

東 魚 金砂子原本にも「の錢」とある。同書は寶曆五年（家藏本）の出入りし、「武三」は寶曆元年に出たといふ事であるから、「へ錢」の方が原句であらうし、其方がよいやうに思ふ。

(34) 我ものと思へは遠き三世相

省 二 三世相に載つて居る、自分にあてはめる運勢がいつくる事やら心待たるゝのである。

秋の屋 過去を憶ふの歟、未來を想ふの歟。

東 魚 過去、現在、未來に亘つての身の上の詳述であるから、人の上ならさして思はぬのに、我が身の上となると、遠き思ひがあると云ふのであらう。

(35) 出家にしても末の松山

秋の屋 末の松山」とあるから、淨瑠璃や演劇にあつて有名な、椀久かと思はれる。この椀久は落魄して發狂なし遂に法舩となつたが、猶且馴染の遊女松山を戀ひ慕つた、多情多恨の男である。

東 魚 末の松山」は奥州の歌枕で、こゝでは矢張り「契り變らぬ」といふ意に用ひられてあるのだと思ふ。椀久

と考へられぬ事もないが、「にしても」が少し變だ。坊主とても變らぬ契りがある。男色の契がと云ふ意ではないかと考へる。

省 二 私は女性關係かと思つてゐた。

(36) 傘を廻して通る念佛

秋の屋 昔江戸に、うまい陀佛の飴賣といふのが有つて二人の男が頭巾を被り、墨染の腰衣を纏ひ、飴の荷の上に傘をさし、（此傘は竹筒に差してあり、ぐる／＼と廻る）。

一其癖年は若いだ、若い陀佛」といふ歌をうたつて、市中を賣歩いて大いに流行した事が、風來山人の戯著「放屁論後編」にあるが、この句はそれを詠めるものであると思ふ。

東 魚 お説に教示を得て有難い。自説は全くない。

省 二 同。

(37) 物おもひ葵咲日を見抜き

省 二 「あなうれしあふ日は稀の神祭（宗春）は加茂祭をよんだ句であるが、あふ日は逢ふ日で葵に通ふ。原句に「葵」を持出したのも、この逢ふ日の意味を汲取らなくては、咲く日を見抜くところが、働かぬやうである。（葵をよんだ昔の作には、源氏物語の葵の巻を聯想させたものが多い）。

東 魚 前説面白し。さすれば「物思ひ」も適切である

秋の屋「見抜きけり」は、易者のやうで面白くない。「待たれけり」とした方が宜いと思ふ。

(38) 大三十日いらぬ所に灯かとはる

省ニ 大晦日は一年の大鬼門だ。借金のある困つた處に灯がついて居る、前が通りにくいのであらう。

東 魚 苦しまぎれに、廓へ逃避したり、何處かで飲んだりして、過ごす連中も多くなるらしいから、さうした、いらざる場所に灯が見える、と云ふのではないか。

秋の屋 此れば大商店などで、平素は灯をとぼさぬ納屋とか物置小屋等に、灯光が見えるといふので、廓へ逃避したり、酒樓で飲んだりするのではなからう。

(39) 掌へ貰ふたやうに星か飛

東 魚 までくと、はつきり見た、と云ふだけを「掌へ」云々と、云つたのではないか。

秋の屋 昔、繪園梅明といふ狂歌師は、掌中に黒子が有つたので、握星子と別號したが、此の句もその類ではない歟。

省ニ 星が流れる有様を、眺めて居るのを「貰ふたやうに」と形容して、詠んだわけかと思つてゐた。

(40) 汐波の男まなふる肩の上

東 魚 「汐波の」は汐波がの意。「肩の上」は肩に就て

はの意かと思ふ。肩で擔ふ事にかけては、男のお前達にも負けないよ、と云ふのではあるまいか。

秋の屋 前解は正しいと思ふ。

省ニ かなり難澁な表現だ。

(41) いき過る比丘尼の顔に腹か立

省ニ 美しい尼さんなら、口で惜しいものだなアと噂するのを、いき過ぎるのだから、感情を刺戟して、腹にこたへる。惜しいを通りこして、あと口が悪い。

東 魚 此れ程のものを、尼にして置く世の中が、いつそ腹が立つのか、或は殊勝な顔をしてゐるが、何の中々な代物だと、腹を立てると云ふのであらうか。

秋の屋 比丘尼であるから、俗人よりも殊勝な顔をすべきに、それが行過ぎであるから、顔をみる人が肚を立てるのである。

(42) 青物の中に玉子は突出され

省ニ 二篇「青物や玉子の色目の目にかはき」の時にも持出した句だと思ふが、未だに青物屋に玉子があつた氣がしてならぬ。

東 魚 「突出され」とは、どう云ふのであらう。玉子も精進には除かなければならぬと、青物の中から取出されてしまふと云ふのか、充分解せない。

秋の屋 江戸附近の農村より、市場へ持來る青物の荷の

中から、苞入の鶏卵を出すのであらう。

(43) 死そこなふて辭世仕直す

東 魚 今度の病氣は助からぬと覺悟して、辭世まで詠んだが、運よく本復したので、辭世の辭句などを訂正すると云ふのであらう。(武七)「辭世のてには直す本復」の類句がある。

秋の屋 此れは私にも経験がある。大病に罹つたのでは無いが、老年になつたので、幾度か辭世を作つては、幾度か字句を改竄したが、自分でも煩はしく成り、遂に墓碑に彫入れてしまつたので、肩の重荷を下した氣持になつた。

省 二 病弱な私は度々危険に瀕するが、そんな時は辭世など、更にうかばぬ。「死ぬ〜といふておかしき我命」(金砂子)。辭世を仕直すのは幸福な次第だ。「辭世を詠んだ人の酒買ふ(金・上)。「本復の見れば辭世の恐しく」(武・十三)「辭世の口で粥に食ひつく」(武十七)

(44) 藤の使は立て請取

東 魚 藤の使から受取るにはと解すると、長い房の藤をもつて来て呉れたのだが、失禮だが、座つたまゝでは受取れないと云ふ意。或は、藤を何處々へ届けろと主人から命ぜられて、主人から使ひに行く者が、失禮だが立つて受取るとも解される。

秋の屋 前説前項が妥當である。

省 二 藤の花を持つてきて呉れたのを、請取るために起つのである。

(45) あかつきかけて寒い廻状

省 二 廻状は今日でいふ回章の事。曉かけてもち廻る急用では、氣もせき寒くもあらう。「水鶏の跡をたゞく廻状」(武十七)。

東 魚 何か急な事件突發で、それが餘り良い事でない處に、「寒」感じをも、含ませてあるのだらう。

秋の屋 「曉かけて」といふから、夜半より持廻るので、大事突發の廻覽狀である。

(46) ころぶ子の稻妻は目へ這入也

省 二 稻妻に怖れて駈出し躓きころぶ。轉ぶ子の目に電光りがピカリひかる。刹那を詠んだもの。

東 魚 轉ぶ時はつと電を見た。見たと轉んだ途端に目をつぶる。と云ふ處をかく詠んだのだらう。

秋の屋 電光は一瞬間のものであるが、此の句はそれに反して、少し間伸びであると思ふ。

(47) 盞かまに赤い天窓の姉いもと

東 魚 鹽風にさらされて、手入れも怠つてゐる汐波女の、髪の赤くなつた姉妹が、鹽焼く竈にゐると云ふのかと思ふ。或は、赤いものを飾つて、外の汐波達より洒落れて

ゐる姉妹、松風村雨であらうか。

秋の屋 須磨の於風村雨に相違ないが、潮風に變色した髪の手には、中納言も苦笑したらう。

省二 特に「姉いもと」とあるから 松風村雨として可ならん。

(48) 長刀の師匠と聞て寄付す

東魚 姥櫻だが、捨てたものでないと目星を付けたがよく聞いてみると、薙刀の師匠ださうだ。これはあぶない無禮者め、などとやられたら大變だ、と云ふ可笑味。

秋の屋 昔、私の親戚に、千葉周作の門人となつて、薙刀の免許を受けた女があつたが、普通の婦人よりも武張つてゐた。

省二 近時、女學校で薙刀を教へるところが殖えたといふ、日本精神涵養の爲であり、又無論「寄せつけぬ」保身用意でもあらう。

(49) 物音へ心く に名を付て

省二 今の音は何んであらう。氣味悪るげに色々噂東魚 風流氣な心持ちではなからうか。あれは水鶏の叩く音だとか、何とか。

秋の屋 夏夜の涼み臺の噂であらう。

(50) 雪掻のはしめは片手懐手

省二 始めは不精にも左手は懐にして、雪かきをやつて居るが、夫れでは、はかどりもせず、遂には兩手で汗をか。

東魚 兩手を出すやうになるのは、だんく面白くなつてきたり、暖かになつて来るからである。

秋の屋 大方商家の小僧などであらう。

(51) 師走にあはぬ御師の顔付

東魚 御師などは、えてノンビリした人物が多いであらうから、忙しい師走には、適合しないと興じて云つたまであらう。

秋の屋 毎年々末に、伊勢の大麻を配附に来る御師で、新春の萬歳のやうな、長閑な顔をしてゐるのである。

省二 「伊勢屋は堅く三河屋は大ふざけ」で、御師は餘りに堅苦しすぎて、師走情緒に一寸合はぬ。

前號(武玉川)正誤表 (姪子)

(頁)	(段)	(行)	(誤)	(正)
一五	下	二〇	陣風	陳腐
一七	上	八	奉賀	奉加
同	同	一七	見て笑ふ	見ては笑
同	下	一	碇の綱	碇の綱



「武玉川三篇研究」を讀む (二)

穎原退藏

(13) 嵩を見て居る桶伏の穴

省二氏の引かれた色道大鑑の説によれば延寶以後この私刑は名のみにあつて實は行はれなかつたらしいが、元祿寶永頃の浮世草子にも散見し挿繪にも見えるから、稀にはなほ行はれたのであらう。繪によるものは皆頭を出すだけの穴は明いて居る。たゞし川柳時代のはすべて想像の句たる事勿論であらう。

(14) 寺の名の立夜の大名

自説の持ち合せはないが、諸家の御説によつてもなほ「夜の大名」が落ちつかぬ氣がする。

(15) みんな寝た夢の上行面白さ

「夢の上行」といふのは、只みんな寢靜まつてから抜出すといふのでは、しつくりしないやうである。やはり寢息を窺ひつゝ部屋から部屋と傳つて忍びこむ感じが深い。喋し合せてた手代がちと滷皮のむけた下女の部屋へか。

(20) 雪隠を借りた所てほととぎす

雪隠で時鳥を聞けば不吉といふ俗説がある。句はむしろこの俗説によつて、運の悪さを言つただけではあるまいか。

(24) 京の異見の届くはつ春

東魚氏説に賛。年末に江戸の出店の放漫な營業報告でも受取つた本店から、早速注



嘘實

日本の慣習としては手紙などインクで書くよりは墨でしたためる方が禮を重んじ可憐とされ、その人ごゝりをあがめられるインクで書くつりもりの或る男がペンがない爲め仕方なしにあり合せた筆で書いて出したとすると、この男が先方で賞められてゐることは全く知らない。

詩や歌の世界などでも斯うした賞められ方をしてゐる人間が随分ゐると思ふ。
 男つて言ふものは女が好きになるぞ、その女に何も彼も話す、必要のない事まで喋舌つて置く。

意をする。それが丁度初春に届くので、屠蘇機嫌に塗面の體。

(26) 新造の二人前付く奉加帳

まだ信心などに縁の遠い新造が、二人前もつく所に興味をもつた作。母の命日にでも當つてゐたのだらうか。東魚氏説の如くも解される。何となく一抹のあはれさを持つてゐる。

(30) 手代を付て初の勘當

省二氏の原解に賛。つけ登せば説明する迄もなく店員に對する制裁であるから、この句には當らないであらう。

中西おさむ

女つて言ふものは男が好きになるぞ、その男から何も彼も聞く、必要のない事まで尋ねて置く。
 女の方は何時までも謎のまゝに葬られて仕舞ふのが常だ。

二十歳前に金のあり過ぎるのさ四十歳を越してなほ子供が無いのとは同じだと思ふ
 三四年過ぎると、ごちらも世の中が厭になるに違ひない。

春雨を踊る男より女が奴さんでも踊る方が見てゐて氣持がいい。

頁 ♣ の ♣ 協 ♣ 川

川・協の仕事はエスカレーターのように挽みなく前進を續けて居るので御安心の上、氣長に御支援願ひたい。大分基礎工事がすすんで来たのも柳界の將來を深思されてゐる諸君の御後援の賜に感激してゐる。

★役員費の廢止

川・協の仕事は目に見へぬ經費が懸るので、理事や評議員には從來役員費の釀出をお願ひしてゐたが、三月からは役員費は全部廢止し、一層の御盡力を願ふことにした。尤も費用が要らぬから廢止した譯でなく、費用は仕事をすればするだけ、役員が動けば動くだけ多額を要するのであるが、全國に多數の役員を必要とする關係上、役員費の支出を願はない方が、役員を推薦する上にも好都合なので

内規を改正することにした。同時に役員任期は總て滿一ヶ年とし正會員中から理事長が推薦する形式にした。選挙が理想だとは思ふが、今のところでは選挙の手續をかけて、それだけの成績が擧るかどうか、手數ばかりかかるのが落ちではないかと思うので推薦することにしたのである。

★特別會員及顧問

從來の名譽會員以外に特別會員及び顧問の制度を設けて協會の陣容をより堅實にすることにした。特別會員は川柳家外の賛助者、顧問は代議士及辯護士に依頼。

★各地の吟社へお願ひ

川・雜の例會では川協會員章の提示によつて會費の割引を行つて

ゐるが、全國各地の各句會でも川・協會員には特に會費の割引をお願ひする。割引實行を應諾された吟社は御一報を乞ふ。本欄に紹介して會員の出席を促す事とする。

★交驥大會宣傳紙の配布

四月十八日名古屋で開催される全國川柳家交驥大會の宣傳紙は各方面に多數配布された。京阪神方面へは大窪又芳君が來援依頼を兼ねて直送されたので二月の京阪神の各句會では參會者へ漏れなく配布された。

★寫眞を募る

遠隔の地にあつて、親しみを早めるために會員の寫眞を掲げたいので近影の惠送を乞ふ。



廣い課題を狭く詠む

川柳指導講座「人相」

塚越正光

こんどの課題は「人相」である。集句へ一應眼を通してみると、流石に一般化された言葉だけに間違つた解釋をしてゐる人はない。でも念のために手許にある大辭典を開いてみると、次の如く記してある。

にんそう（人相サウ）（一）人の容貌。人のかほかたち、手足いろつや等すべてからだの様子から顔の表情、音聲その外舉止動作に至るまでの特徴（二）人の容貌を見てその人の將來の運命吉凶をうらなひ判斷すること。

とある。つゞいて人相書、人相見等の項が出てゐる。

人相に關聯した言葉としては、長命の相、短命の相、福相、貧相、吉相、凶相、死相、女難、劍難、水難、火難の相其他があるが、本欄の作家諸君は概ね「人相」といふ言葉だけを詠んでゐるやうである。考へやうでは廣い課題を狭く詠んでゐる譯である。

私達の先輩の句からこの課題に相應しいものを得ようと思つて、書棚から「川柳百人一句初篇」を抜き出して繕いて見ると、はつきりそれと指せるものは、

長命の相ある男門を掃き 紋太

が一句あるのみで、作例として好箇のものとしては、

端然と坐れば子供寄りつかず 劍珍坊

ひげ剃つて父とおなじ顔になる 五萬石

佛ただにこやかに居る恐ろしさ ○丸

血走つたまなこ鳴尾の戻り客 當百

佛の姑口あいて寝る 雀郎

等があつて、いづれも著名作家の自選した作品だけに、立派なものばかりである。ついでに柳多留篇を披いて見たが人相の文字は見當らないが、

惣領は尺八をふく面に出來

景清はお尋ねものに 能い男
持參金瘡瘡よけの 守りにし

等を參考資料にあげることが出来るが、いづれも現代には
遠い題材ばかりで、作例にはならない。斯ういふ課題のこ
なし方もあるといふことを知つて貰へればよいのである。

さていよ／＼諸君の句だが、

正直に寫る 鏡を怒られず

自分の人相が悪いのを憫にあげて、鏡へ寫つた顔へ腹を
立てたり、鏡が癢に觸つたりするのが人間ではなからうか
鏡がそのまゝを寫すのは敢て川柳眼をとほさなくともよい
のではあるまいか。歪んで寫る鏡だつてあるのだから、も
う少し眼をみはつてもよき相である。そこでこの作家には
再考を促すだけにしておく。

福相に先づ母親がさきに惚れ

見合の寫真とか、或は取引とか、いろ／＼な場合が考へ
られるが、福相と母親を配したところに平凡ながら、この
作家の着想をまづ認めてもよい。たゞ

福相へまづ母親がさきに惚れ

と假名使ひをたゞすだけでよい。

(句主 朝鮮 三角山君)

番犬に 人相破られてれかくし

恐らく作家は押賣とか無心に來た男が番犬に吠えられて
人相を見破られたやうに思つて、てれかくしに苦笑ひをし

たといふ情景を詠みたかつたのであらうか、これでは形を
なして居ないといふより外にはない。

この家の 犬に 人相 見破られ

とでもすれば、作家の言はうとしたことはよいのである。
てれかくしを無理に句面へ押出さずともこれを感じさせる
ことが出来る。(句主 朝鮮 千秋君)

人相て 就職の 出来る 職業婦

川柳に省略は欠くべからざるものではあるが、職業婦人
を職業婦といふ省略は省略にならない。それに人相で就職
といふ辭句では、女性といふ感じが出ない。そこで職業婦
人へ重點を置いて

就職の 出来る 容色を 羨まれ

として見たが、私にも満足出来ない。いつそ人相と就職
を對照にして

人相て 損をしてある 勤め口

ではどうやら作家の意圖とは遠くなつて仕舞つたやうであ
る。(句主 朝鮮 駒坊君)

人相と 別に 貧乏しつゞける

この程度なら別に私の手をつけるところは無いといつて
もよいのだが、

福徳の相へ貧しさ つきまといひ

と人相を具體的にする手もある。(句主 岡谷市 幹君)
師走の 瀨面とは 違ふ 押を見せ

師走なら師走、年の瀬なら年の瀬でよくはなからうか。師走の瀬としたところが……この言葉の有無は論ぜず……これが強調されはしない。それに面とは違ふ押とはあまりに下品ではあるまいか。強いて上品振ることもいらぬが、せめて

年の瀬の人相どれも 險しすぎ

とありふれた観方でも、金を追ふ人、金に追はれる人、その種々相を描いてみたい。(句主 朝鮮 石燈籠君)

人相に合はず榮譽の椅子につき

榮譽の椅子とは官廳、銀行、會社のいづれにしても重職である。その椅子についた彼の人相がそれに似合はないからといつて、こんな風に詠まれては氣の毒である。世間の人から川柳は悪口をいふものと思はれてゐるのを訂正するには、作家がもつと同情をもつてすべてに對するやうにしたいものである。(句主 大阪府 紫香君)

宰相も寫眞て見れば たゞの人

斯う思つても見たいが、寫眞で見ればたゞの人でないのが現實である。それは印綬が物を言ふからである。これが桂冠の後なら左様も思へるのが眞實であらう。

和服着て 元宰相も たゞの人

としたら餘りに獨斷過ぎるか。(句主 大阪市 龍城君)

人相も 違つて 世の 中甲乙丙

この甲乙丙は人相のよさ悪さを表現したのでもあらうか

それだとすれば、

人相も 甲乙丙と 違つてる

とするのも一つの手法だが、

人相へ 探點を する 面白さ

と世間を斜に觀ることも面白いではないか。(句主 山口縣 悲戀坊君)

片あくぼ手がかりにして 保護願

保護願といひ片あくぼといひ本欄の作家としては立派なものである。この調子を失はぬ事。(句主 兵庫縣 普夫君)

話かける その人相に 酒場出る

人相の悪い男に話かけられたら薄氣味悪くなつて酒場を出たといふことを、みんないつて仕舞はなくとも、その情景を描くことが出来る。つまり

人相の よくない男 猪口を 呉れ

で話しかける以上の接近を示して、こつちが逃げ出すことへまで觸れない方がよい(句主 今治市 向上庵君)

人相を 胸に 疊んだ 刑事の 眼

これもまず本欄の作家としてはままとまつてゐる。この句境を守つて精進されれば、やがては良い作家として進出出来るに違ひない。(句主 今治市 文庫君)

私の句は以て範とするには足りぬかも知れないが、舊臘きやり吟社の畫賛研究の際「春駒」の賛をしたものがあるから記さう。曰く

二代目は素性正しき 目鼻立



春 寒 爐 邊

森 東 魚

「小供が靴を右左間違へてはいてゐるのは、間々見る事だが、大人のは珍しい。私がある工事場を受持つてゐた時の事であるが、朝、例の通り監督員詰所へ挨拶に行つて、主任のK氏と爐を隔て、向き合つて馬鹿話をしてゐながらフト氣付くと、オーバシューズをかけた短靴をはいて居る彼氏の足がどうも逆に外の方へ反つてゐる。」

「オーバシューズがあべこべぢやないですか」
 私は遠慮なくかう云つた。やゝ周章た彼は、足元へ目を落すなり、爆笑した。
 「ワツハツハ、家内の奴め、ウアツハツハ」
 さうして、そゝくさとして、オーバシューズを外したのであるが、見ると

其の下の短靴そのものも、あべこべだつたのである。妻君のエラーでは完全になかつたのである。
 「どうも歩いてながら變だと思つた」
 彼氏は、かう云つて、ツルリと一つ顔を撫でた。
 それから數日経つてである。私は電車の座席からすぐ前の足を見た。大人の足である。ゴムの短靴である。そして、右と左がアベコベなのである。私は、過ぐる日の滑稽を又思ひ出した。粗忽者も随分あるものだと思ひしたが、フト目を上げて見ると思はずハツとした。忽ち笑ひは消え去つた。冷たいもので顔を撫でられたやうな氣がした。——。前のその人は、黒い眼鏡をかけてゐた。彼は盲人なのであつた。
 笑へぬ滑稽、それこそ、一層哀れが深い。寧ろ盲人の坎の良すぎるのは哀れが薄く思はれる。
 憎らしい程に盲目の坎のよさ
 聴て、この句を私は手帳へ書いた。

この頃俄かに債券が人気があるやうである。

「三萬五千圓當つたのは、まさか、サクラぢやあるまいな」

こんな馬鹿口を叩き乍ら、晝休みの事務室は賑かである。債券の籤は、確かに當るに違ひない、當るのである。只いつも自分でないのである。

「禁酒して、債券を一枚でも買はうか」

私は女房にかう云つた。

「當りますか」

彼女は、實に明瞭極まるものである私は、黙つて二階へ上がつてしまつた。

債券の當つた話皆ナ話

S百貨店で光筆寫眞の展覽があつた實に良く出来てゐる。原畫と並べても區別が付かない位である。華山も、竹田も、栖鳳も——が、然し、それが似れば似る程一層そこに何か知らない一



日本名所
名物川柳

(京都の巻)

山川紫明選
朝賀大鱗畫

(八) 清水寺

西國も此處で陽氣な風に逢ひ
清水の舞臺から見る花曇り
耳かくし清水寺へ何の願
紫香
洛外
浩詩

抹の佗しさが私には深かまざる氣がされてならない。

わからないわえと新ダイヤわかるなり

「路郎は摺り切れやしないか」本當に私はさう感じたのだ。舊臘、キングを訪れた時に——、摺切れたと云ふ感じのある人物に、私は兒玉源太郎、小村壽太郎兩氏を偲ぶ。全く兩氏は日露戰爭で摺切れてしまつたのではなかつたか。川柳人では、卯木を思ふ。川柳江戸砂子に尊くも摺切れたのである。嘗て、私の友人で、「油が切れた」と一言を残して死んだのがある事は本誌に書いた。油が切れたのは、油さえ差せばまだ動いて呉れさうに思ふ。然し摺切れたのは、油をやつてももう間に合はない。

無暗に、摺切れるな、さうしてお互に、有効に摺切れようぢやないか。

摺り切れる人間もある春の風

(昭和一一、二、二三稿)

足早やに團體が行く五條坂
 音羽山子安の塔が霞む春
 片影の清水焼へ人通り
 清水の舞臺へ時雨來そうなり
 五條坂清水寺からたそがれる
 花の山法の山清水鐘が鳴り
 清水の欄の巡禮へたそがるゝ
 清水寺林間の酒高過ぎる
 來て見れば音羽の瀧のあつけなし

◎

清水寺へ來て京都中見て歸り
 鹿鳴

★

清水寺は八坂の塔から三年坂を過ぎて清水坂を登つたところにある。法相兼眞言宗の巨刹で本尊は十一面千手觀音である。平安寛都の前數年、坂上田村麿が僧延鎮のすゝめによつて居宅をここに移し佛寺を營んだのが本寺の濫觴である。寺域には名勝が頗ぶる多い。世に謂ふ清水の舞臺の眺望のよいことも見物客が必ず杖をこゝにひくのにも明らかである。田村堂忠僕茶屋、僧月照の墓等が塔中に散在する。西園巡禮第十六番の札所である



町・横・柳・川

豆萩が風のやうにやつて来て「もうお目にかくれぬかも知れぬので暖乞に來ました」といふ譯を訊けば、友だちに鮎を喰べさせ、今晚の十二時までが危ぶないと聞きましたから、いふそれからもう一年餘りになる。

餘儀なく鮎を喰べさせられた紳樂が一ト月半も過ぎて、怖々からだをひねつて見て、「アア痛た、まだ生きてるらしいぞ」

「時事」の速記で寧日のなかつた花戀坊。社が潰れて蔵になつたが、いたたくものはいたいで、母親と女房を連れて伊勢詣をした。蔵にならなかつたら一生親孝行が出来なかつたかも知れぬと元氣一ぱいで再起を待つてゐる。蔵は飛んでもほがらかほがらか。

★ 南北と水府のコンビがワレて、南北と吉丁になつたが、水府と誰???

★ 雨迷が重役室から電話で「十七屋でなんだんね、アアそうじゃか。飛脚の事だツカソレなら話が判りまんね。ワテもそう思つてましてん。」會社の用が忙しいのかと思つたら古句研究。

★ 路郎が南海高島屋の中を迂路々々してゐるうちにバリカンを買はされた。別に酔つ

★ 柳友観月に

水谷 鮎美

ひと昔まへの某日、週刊朝日を小生がみてゐると、傍に佇つた觀月君とひと言ふた言、こゝろに觸れあつてからの川柳への光明だつた。當時獨身くらぶの二人は愉快だつた。吹雪の有馬へ、春雨にぬれて句會へ、ビールの泡にうつる人生、酔ひしれて午前四時の路に肩くんで寝し秋の朝の美しきわれらの影。よく茶番に彼が敦盛をやれば小生は熊谷で演り小生が權八をやれば彼は長兵衛で名科白を聞かせてくれたものだ。ふと病にたはれてはや十ヶ月、信仰に生きてゐる現在の君をおもふとうれし涙がとどめもなく片頬をながれる。語りつくせないだけに君のち

てた譯ではなく、あのチャキ／＼といふ音を想像して童心が悠然と湧いて來たんだぞうな。

そのバリカンでアイトミボーを丸刈にした機見女、腕が鳴るさ見へて、東魚センセイを丸刈にしたいさその來訪を待機してゐる。川柳家で丸刈志望者は今のうちに川・雜無料丸刈所まで申込まれたい。(不死鳥)

から強さを信じてやまぬ。「近作柳樽」に見せてくれる君が柳心合掌の健吟を祈る。(詩人一茶を讀みつゝ)

晝の雨きみのこゝろに

あたたまり

鮎美

★ 殘燭作家の癖

桑原京郎

作句怠業數年、燃えさしの線香にチョツピリまた點火した。

柳句の聖火は柳翁の昔より不滅のまゝなれど、燃えさしの我が作句熱には何寸かの限度がある。急ぐも遅作、せかるゝは心、だが作句早きが故に尙からず、遅きが爲に恥なし矣要は、遺す一句、遺る一句への精進なのだ。

流線が迫つて牛がまた打たれ



「六厘坊十句」 の再檢討 (六)

木村 半文 錢

紅牡丹／＼増す鐘を撞き

日本坊 讀んで句に現はれてゐるだけ

の意味か、他に意があるか、少し迷ふよ。他に意味があるとすれば我輩の淺學なる今以てチヨット解するに苦しむ。現はれただけの句ならば観ひ過ぎて的を射外したと評しやう、暫く疑ひを存して他の評者の教を待つ事とする。

花紅坊 新派詩人の畑を冒したら叱られます。

松窓 別に叱られる程の事もなからうけれど僕には分りません。諸先生の教を待つ。然し、僕は黎明の叙景かと思ふ。僕はそれとして頂戴してをくけれど紅がば多少難なしとは言はれないだらう。これも異説あれば伺いたいものだ。

館中坊 曙の景と云ふのが多数だが、夕照にも取れる。併し、増すで曉景の方が勝つ。僕は朝寢坊でこう云ふ實景を知らない故來年の夏になつたら夙起をしてよく調べて見て頂戴をきめませう。

劍花坊 社中文象子に見せたら頂戴するだらう。叙景川柳として水彩畫のやうな趣がある。

六厘坊 「だん／＼増す鐘をつき」と時間を含むのはどうしても句でなくては駄目だ。繪では空間の寫生になる。この句叙景的叙事詩でも云ふべし。

七厘坊 コノ句は松窓が黎明の叙景と云つたは間違ひなし、曙をうまく云つた句そして僕は東(ヒンガシ)と讀むが貰ひたい)が刻一刻紅になつてゆく度に、鐘も又一つづ／＼多く撞く(半註、撞く?)と云ふ風に解釋する。しかし紅が段々増してとぞ眞赤に今や旭日上らんとする時ゴーンさうち出すと云ふ解釋もして見たが、前の方がおとなしくていいやうに思ふ。

六厘坊 七厘の前者の解は趣味が深いがこの句では後者の説が穩當である。

角戀坊 だん／＼と云ふのが聲調の上から云つて如何あらうかと思はれるが佳句だ。無論、明の鐘、東天將に紅ならんとする叙景と鐘を撞くと云ふ叙事と相俟つて句を成して居る。

なぐさ 此句は餘り喜んで頂戴が出来ん。どうも云ひ廻しが足らぬ様な感がある。紅牡丹／＼増すと、まはれ迄で下五が無かつたら何であらう、此紅が——で東天紅をきかしたのであらうが僕なればちと説明に過ぎるかも知れぬが「空の紅だん／＼増す鐘をつき」とか何んとかしたいね。何れにしろ餘り宜い句の様に思はれぬ、併し叙景としての着眼は流石に結構々々。

ふくべ 餘り此の句の評は色彩集其のまゝなれど、よく思ふとスケッチにある釣鐘堂が思ひ出されて叙景川柳として其の寫



川柳塔
路郎選

獨唱は仕舞の眉で媚びて居る
考へと一所に行けぬ子を叱り
口笛が似合はぬ歳の獨身者
憤慨は涙となつて膝にしむ
引眉で媚賣らうとは淺間しい
瀆職の網から洩れた雑魚の群
スラム界の事書き立てゝ十二月
欠勤の出来る保證の首であり
白髪そのまま母の眼鏡のうれしけれ

大坂 後藤 青児

同

同

同

同

同

同

同

兵庫 水谷 鮎美

生さしてはたしかにうまい。

六厘坊 だん／＼が聲調美を害して居る云ふやうな難もあつたが何所の點が害して居るのか淺學の余には少しもわかり兼ねる。なぐさ君の下五が無ければ云ふ批難も尤もであるが、この句全體から見れば即ち下五の鐘をつきから推して行けば上十二は曉の叙景に取れぬことはなからう「空の紅」ではチトお丁寧過ぎる。

半文錢附記 要するに黎明を叙した句には相違ないが、今から見れば随分叙法は月並臭いと思はれる。「紅がだん／＼増す」の叙法など特にイヤ味なもので「増す」は極めて月並的な觀點であり叙法である。かうした作品は勿論六厘坊自身にしてみれば、俗惡低調な當時の川柳壇より一脈の清新味を見出すべく努力した試みの一つに過ぎないから、その句の巧拙よりは、特に、さうした事情より餘儀なくされた過程に敬意を表さなければならぬ。當時の川柳は名目こそ川柳とか新川柳とか稱してゐたが、實質的には狂句との分界がハッキリせず、寧ろ、一部の人々には狂句の側に興味を抱き、世人も亦、その狂句を歡迎してゐた關

スタートに立つた姿は勝つ構へ	同	朝 鮮	池田 可宵
叱られた子が下りてくる段梯子	同	同	同
古本屋どれが番頭さんなのか	同	同	同
以下略すその略された中にゐる	同	同	同
チヨコレート親のある子は食べのこし	同	同	同
財産を一人で貯めた様に云ひ	同	大 阪 府	朝田 新水
放浪性薄ら寂しい自分にて	同	同	同
しめ殺す鶏のさけびに眼を閉ぢる	同	同	同
縫針をとどめる程の物想ひ	同	同	同
ほそく と煙をあげて朝の陽よ	同	同	同
取りとめもなき妄想へ今朝の夢	同	松 本	石曾根民郎
傘の雪ちかつた友の死にふれて	同	同	同
鍵をもつをんな妖しく扉を排す	同	同	同
米代を質す姿は灯に立てり	同	同	同
わが妻の眸に畫靜かなる日記	同	大 阪 府	宮岡 白峯
世帯苦を打ち明けてゐる帯の色	同	同	同

歌かるた視神經ばかり發達し
歌かるた讀手いづちを尻目なる
馬は戀しき杯と洒落てよみ
のやうな他受もない狂句鼻に墮してゐたの
である。だから、斯うした境地より進出し
て、兎にも角にも川柳の境域へ文學らしい
ものの内容を持ち込み來つたさいふこさは
六厘坊の努力であり活眼である。假令、か
うした機運が日本の文物轉換期に達した日
露戰役の特徴であるにしても、六厘坊を茲
まで驅り立てたのは外來の勢力よりは、寧
ろ、彼れ自身の内面的苦悶からであらうと
信ずる。恐らく、永年の狂句に殃された反
動として、一度は文學的に浮び上らなけれ
ばならぬ必然さに置かれたものだらう。そ
の意味で斯うした叙景的畑に眼を着けたの
も一つの進歩である。大體、六厘坊、七厘
坊等を中心とした所謂市岡中學初期の文學
少年のグループでは、主として俳句、短歌
を研究し、川柳は其の餘暇の一部でしかな
かつたのだ、この「春潮」三號の中に於て
も俳句は群をわいてゐる。今、その目次の
一部を見るに卷頭より

「一茶と日人評 紅石(六厘坊)」

三圓は亭主が使ふ主婦の友

同

さくらさくら太平洋に伸びて春

同

東京は曇り大阪亦くもり

同

獨り者炭をつぐのもいたにつき

同

仕舞ひ花身の上話ばかり聞き

同

肝心の話へ咳が出てしまひ

同

鼻先きの肉を目めてに走らされ

同

一通話二通話それから逢ひにゆき

同

初夢は子の事だつた子澤山

同

金のない別れ女はツンとする

同

子の病なほしてもろてほめちぎり

同

お座敷に十露盤が要る客なりし

同

信用を受けしは金か人間か

同

三浦環獨唱會

同

バタフライ日本人の死を選び

同

大阪府 妹尾 變人

同

大阪 西 いわを

同

凡董全集解釋

碎秋(七厘坊紅石

等があり、俳句は各篇の餘白に多く出されてゐる。短歌亦然り。川柳は漸く卷末に「新柳樽」と題して五頁に亘つて四十四句を掲載されてゐるに過ぎぬ。顏振は「ふくべ」「頑坊」「朝寝坊」の三人と六、七の兩厘坊である。そして「本號評判記」の末文餘白の中に

「川柳が非常にはやつて來たネごなともせつせと勉強なさい」

とあり、筆者は六厘坊らしい。その下に手筆で「冷かしなさんな」とあるのは回覽の際の戲筆であらうが是も筆跡から見ても六厘坊らしい。斯うした雑筆から推論すると、川柳は彼等仲間の餘技であつて、主眼とするのは俳句だつたらしい。尤も、文學を廣範圍に研究する目的であつたことは、十句集の結論のところで七厘、六厘の兩坊が自ら語つてゐるのを照應しても分明的である。最初はさういふ風に餘技だつた川柳が遂に彼等を魅了してしまつて全力を注がせるころまで追ひやつたのである。七厘坊は十句集の結論で

「僕は川柳は歌よりも俳句よりも又新體詩

法名をよむには邪魔な猫柳	金澤	安川久流美
紫煙ゆるやかに水晶の盲判	同	同
晝風呂の番臺猫が畏まる	同	同
つきつめたしぐさは母に案じられ	兵庫縣	長崎 柳秀
怒らしてからの仕事にはかどゆき	同	同
通學へ巡查優しう腕を上げ	同	同
赤ん坊は泣いてる餅は焦げてゐる	京都	明石 柳次
ラヂオかけたまんまおしめ洗うてる	同	同
赤ん坊が出来て一人の酒に慣れ	同	同
打てば鳴る女が膝を寄せて来る	大阪	姫田 夕鐘
けちくさいことはやめはれ嫁がない	同	同
雨となりしよんぼり戻る大工さん	同	同
大笑ひして、胸算忘れずゐ	同	大西 八歩
遠く神樂をテキヤ聞いている	同	同
想ひ出が髪の手入れをたのしませ	同	同

よりもむつかしいと思ふ」

と告白してゐる。恐らく、當時の少年としての六厘坊なり七厘坊は、俳句、短歌に比して川柳は最初興し易すしこして馬鹿にしてかゝつたのが、その味を知るに共に段々に興味を湧き、深く味はへば味はうほごに六かしくなり、七厘坊の如きは現在の境地まで全生涯を捧げつくす宿命的伴侶となつてしまつたのである。六厘坊も在世ならば日車以上の努力を傾注して来たであらう事は疑ひを容れぬ。だから、六厘坊としては斯かゝる平面的描寫たる叙景川柳でも、一つの新しい開墾に對した餓には相違ない。かゝる場合、その句の價値は單に巧拙以外の意義にまで高められて良いと、私は考へてゐる。是は六厘坊に私淑してゐた私としては我田引水的な六厘坊讚嘆の辭に過ぎぬが、兎に角、私はさういふ氣持が胸に一杯溢れてゐる。(未完)

▲六厘坊

六厘坊は姓を小島、名を善右衛門と云つた明治二十一年に生まれ明治四十二年五月十七日に病歿した。自ら天才六厘坊と稱してゐた。(略)



鰻を食つたが 生きてゐる

西田 艸 樂

野暮なやうだが、どうあつても鰻だけは食はない事にしてゐた。鰻といふ魚はかなり昔から日本では食つてゐる。既に大寶令中に制定された食品中に鰻、鰻の鮓などが見えるから、おそろく神代の時代から食つてゐたものかも知れない。

併し私の知人で鰻を食つて一命を捨てた人が現にあるし、美男子で強い力士だつた福柳も鰻を取組んでは助からなかつた事も有名である。人間が魚を食ふ事を知つてから、幾千年幾万年たつて知らないうち、鰻が恐ろしい毒を持つてゐる事は極めて早くから知られたに違ひない。幾多の犠牲者を人類が魚肉を食ふ事を知つた初めに出したらうと思はれるのだ。何故ならば鰻といふ魚は、いやしくも釣餌にも掛り易く、浅い處にゐるし、容易に古代人の手にも掛つた筈なのである。

（もう外に死人なしかさ鰻をかひ（古句）それ程恐ろしい魚でありながら、まかり違へば命を的にでも食はればならぬ。人間とはあさましい食ひ意地を持つてゐるものだ。

死なぬかさ雪の夕にさけて行（古句）これで死んだら覺悟の前だといつた連中にかゝつては、どうにも仕方のないもので、大阪府では、鰻を營業として扱ふ事は禁じてある筈だつたが、命の惜しくない大阪人は中々聞かうさしない。かつて私は衛生技術官として、飲食物の取締の役目を奉じてゐた事もあるので、食物中毒には相當敏感に注意する習慣があるのだが、その私がさう／＼鰻を食つてしまつたのである。

東京の雀郎氏、山口縣の啞人氏といふ珍客に私の三人を安井ひろし氏が案内し

た處が、此の鰻料理専門の家である事を始めは知らなかつた。鉢に並べた美しい生魚肉が、恐ろしい鰻ださ知つては、一箸も觸れて見る氣にはなれなかつたが、雀郎氏やひろし氏は如何にも美味さうに食ふし、鰻の外に何も食ふ物がないので仕方なく、呑めない酒を嘗めてゐるより外仕方のない手持無沙汰をこらへてゐたが、あまり諸氏が美味さうに食ふから、ほんのちよつと、食べて見る氣になつて一箸口にして見たが、半ば生きた心地はなかつた。でも實に美味しいものだと思つた。生肉を三切ほど口にして、これなら人が好んで食ふ筈だと思つた。

しかし、私は内心びく／＼ものだつた。もし今にも口唇が痺れても來たらどうしやうあの恐ろしい毒薬、テトロド、トキシシが、今にも猛威をふるつて、全身の血管を巡りだしたら、もうおしまひだと思ふと、珍客の前だが言葉が氣輕に出ない。啞人氏が雀郎氏を捉へて盛んに川柳論を闘はしてゐるが、始終無口で聽いてゐるばかりであつた。きつさ雀郎氏は艸樂といふ男は口の重い奴だと思はれた事さ思ふ。

鯨が無いと冬が越せぬ様に言はれてゐる南北さんに聞かれたら實にはづかしい臆病な話だが事實私は命がけだつた。

鯨の一番恐ろしいのは卵巢中の毒素だと言はれてゐる。一滴も血の附着しない様に洗つて食へば中毒しないとも言はれてゐるが、どんなに大丈夫ですよと料理人が言つてくれても、もの事には過ちがないとも限らないから信用が出来ない。私はまだ進んで試みたくないものに、鯨を食ふ事と、飛行機に乗る事である。萬一の奇禍を思ふとまだ一命は惜しい。鯨を食つても、餡粉を食つた時だけは遠慮しろといふのださうだが、あの晩は番茶の二十五週年記念大会で、連中みんな餡粉のおはぎを食べたし、而も鯨を食ふ直前に喫茶店で餡のはいつた饅頭を食つたのである。「餡粉を食つてゐなげりやもつと食ふんだが」なんて盛んにやつてゐる雀郎氏は勇敢なものだと感心した。

だが料理さへ完全であれば、必ずしも餡粉を食つた後でも危険がない事だけはあの時誰も死んだものがないだけに確かに経験した事である

私の知つてゐる醫學士が、鯨の毒素を研究して、早いうちなら助かる注射がある事を語られた事があるが、その早いうちが甚だ危ないものだ。

龍宮の鯨の

請人ウニコール

さいふ匂があつたと思ふ。ウニコールは海獸一角の牙で、私は徑一寸餘、長さ三尺位なのを見た事がある。和漢藥屋には輪切にしたり、粉末にしたりして賣つてゐる白い象牙の様なものであるが、甚だ高價である。

持參金ウニコール

迄のんだつら
の匂のある通り、解熱薬でもあり、痘瘡に服用させた事がわかるが、解毒薬にも使はれたので、鯨の請人ウニコールさいふ匂のある所以でもあるが、鯨の中毒にこんなものは信じる氣にはなれない。



船の旅

勝浦線時間大改正

(一日で神戶、ドロ游覧)
聖皇御遊覧

温泉へ

別府線
勝浦線

それから小豆餡を食つて鯨を食つけないといふ謂れが分明しない。むしろ私は餡など澱粉性のものは、毒物を包んでしまふ性質があるから、真いのでないかささへ思はれるが、うっかりそんな事

大 阪 後五 時發

神 戶 同六時四〇發

和 歌 浦 同九時四〇發

を信じてもちつては困る。

兎も角私は鯨の味は忘れ難いものゝ一つさになつたが、まだ重ねて食つてみる氣はなく、食つた記念に此の一文を草して、死ななかつた證據にする。

大 阪 商 船 一呈進書内案一



書・齋・よ・り・麻生路郎

日本精神小説

ある晩、脇田勇氏を訪ねたら、

日本精神を云々

されたので、自

分はラヂオで號

令をかけて貰は

ねば體操が出来

なくなつたのは

日本精神の崩壊

だと云つた。ラ

ヂオのお経もそ

の通り。ラヂオ

をそんなものに

使用するやうで

は日本の文化も

知れたものだし

日本精神の發揚

も勃興もあつたものではないと云ひ

切りたい。

菊池寛氏が毎毎に日本精神のことを一寸書いてゐるが、あんなに難し

く考へないでも日本精神を要約したのが教育勅語だと云つてしまへば一番早判りがするであらう。

×

先日、某社の社長の葬式へ出かけ社葬といふものに呆れて歸つた。葬式でなくて、まるで社の宣傳であり事務であつた。供花を贈つた社の宣傳でもあつた。一寸情ない氣がした。何處にも憂愁の氣は漂つてゐなかつた。燒香は混雜そのものであつた。

私は亡き社長のためにも遺族のためにも、その葬務のために忙殺されてゐる社員のためにも氣の毒でならなかつた。尤も嚴肅であるべき人の死に對しても宣傳以外に何物もないのであるから、當今は日本精神の歿落期だと云つても過言ではなからう

大石の定紋

由良之助の紋章を二ツ巴としたのは人形つかひの吉田文三郎がしたの

で、二ツ巴は文三が定紋であつたのだといふ説があるが、それは間違ひである。大石家の定紋が二ツ巴であることは大石氏の故宅の屋根瓦が二ツ巴であるし、又大石の内室の里の石東氏から主税が誕生した時、産衣を贈るのに紋所の二巴左にや右にやと尋ねて來た書牘があるのにも見ても明白だ。文三郎も元來二巴の紋であつたのか、文三郎が謀つて大石の紋を自分の定紋にしてしまつたのか、そこところはハッキリしないと云ふやうなことを曉晴翁の「雲錦隨筆」で讀んだことがあるが、一寸面白いと思ふ。沼田頼輔氏の紋章學と云ふ本が今、手許にないので二ツ巴といふ紋の歴史が判らないが、二ツ巴と云へば大石の代名詞のやうになつてゐる。古川柳にも

忠と義のそなはる二つ巴なり

末世まで外に二つとない巴といふがある。

漫 画 珍 戦 術

就 職 珍 戦 術

漫 画 トリ オ

小 川 武
北 幹 夫
樋 口 ヒ ロ ム



(一) 泥 的 戦 術

社長「ド、ド……ドロホウ？」
變装した青年
「お静に〜 實はこれをお願ひに上り
しましたんで」(キ)



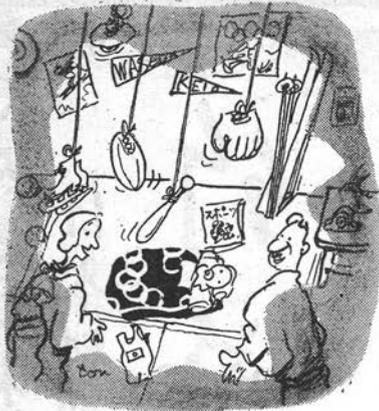
↑ (一) から め 手

會社の前で應募者の靴磨きをやる(但し無料)この心性に惚れた重役が「キミイ働いてみんかネー」

(三) 似 顔 戦 術

「ハイ趣味は漫画であります。ちや一枚似顔を描かせて貰ひます」ウンと男
まへに描くぞ
「ホーこりや良く似ざる。早速明日から来たま〜」(樋)





(四)二十五年計畫

「今から親しまして置けばキツト偉大なるスポーツマンに成るぜ、スポーツマンが一番賣れ口が良いからナ」(ヒロム)



→ (五)度 膽 抜 き 型

審査員「ウへへ……こ奴、心臓の強い奴ぢや、時節柄早速採用ぢ」
(但し、この型、まかり間違へば脳病院行きの虞れアリ)



(六)アラ、その瞬間

重役「ホイ、しまった、ナフキンないか」
女給「ハイ」ミ差し出したのがナント彼氏の履歴書
「ホー、左様か……ムニヤ〜明日會社へ呼んでくれ給へ」



(武)

天然鰻の味

日本料理の粹

竹葉亭



本亭 大阪市瓦町(大手橋西詰)

南店 同 湊町驛前(阪急ビル) 御座敷と食堂

北店 同 堂島濱通(渡邊橋北詰) 御座敷と食堂

梅田阪急百貨店 七階和食堂

戎橋三笠屋 二階和食堂



行 路 集

(3)

長 野 晴 濱

友 だ ち

青雲を共に達せぬ人三人なほも希望を語り更かしぬ
金儲にあせれる友といゝ年して歌よむ友となど仲のよき

商 談

思ひよらぬ歌出でくなり歌ひたき心もやもや起るたゞちに
起るときは場所時がらをわきまへず歌ひたき氣の起るなりけり
こはいかに如何に説きてもきき入れぬ人を前にして歌の湧き出く
敵ながらあつばれ人と渡りあふ商談の窓の秋のきいろ日
好い兒だから今日は言ふことをきくんだよとこはき相手を歸しやりつる



女 一 路 集

慕集句

女 將 麻生葭乃選

江戸趣味が扱け女將の勝氣なり
 心得て女將の趣味に合せて來
 耳打の女將と笑ふお人柄
 よく肥また女將頃よとこへ出る
 纏まとつた話へ女將水ををさし
 何事か女將笑つてうなづきぬ
 割わつて出る女將も少し酔よつてゐる
 痰たん呵かも切りさう女將肩かたを寄せ
 計はかりを聞いて女將が語る人格者
 短冊たんさふを書かけ女將にせがまれる
 女將最もう養子やしよのほしい年としになり
 なんだ秋あきかど女將のなほこみなが喫くひ
 表うらまで女將も出てるよいお客
 信心しんしんの幕まくらは女將の名なで染ぞまり
 女將のからおごつて貰もらふ稻荷いなりすし
 呼よびにやるまでを女將に酌しやくをさせ

木履 悪源大 鮎美 紫香 菊路 海棠 幹蝶 朔風 香方 斗風 雅幽 向上座 曉童 同水

無一物女將に今日は借が出来 同
 五 客
 あつつきりりと女將名士の名を數へ
 身に過ぎだ玄關へ女將乗りつける
 愛想あいさうだけ吞く女將は座を外し
 灰飾はいしやく女將の皺しわが目立つなり
 借りのある女將が寝ねてる十二月
 人
 先生とだけで女將も名を知らず
 地
 その客へ女將妾めかけが遇ふと云ふ
 天
 女將のから見どころあつて叱なられる
 軸
 女將のから鱈たらと呼ばれて氣に入いられ
 久々で女將の貸ある人を訪まひ
 選後短評
 天、地、人の句はいづれも女將の心理を
 解剖して其特異性を出してゐる。

蒼梧樓 文庫 ライト 新水 水客 春巢 澄風 葉光

澤 田 小 兒 科

醫學博士 澤田四郎 作

大阪西區成玉町本通一丁目
電話天下茶屋二九三番

窓口は朝の湯呑を伏せて開け
 窓口で 肩身のせまる 貯金帳
 窓口へ大きく 釣銭いらぬ様
 窓口であるところ有るもの
 借る方は窓口などへ寄りつかず
 窓口で 見る 交叉 點 面白し
 窓口へ 孝子ハツキリ答へたり
 窓口の大きな鼻とおもふなり
 窓口へ 泊る 氣儘な 大地主
 窓口へ 小僧帛紗のまゝで出し
 金替へに來た窓口へ 腕を張り
 窓口へ だん／＼ 近づく 國の景
 人様のものを窓口から覗き
 窓口へ 大きな欠伸投げつける
 窓口は 少うし 雪にぬれてゐる
 窓口へ 或日花瓶の水をすて
 馬券買ふ窓口の手のたくまし
 窓口へ 立つた 恩師の服は褪せ

木履 蒼梧樓 紫香 文庫 同 同 幹 鮎 美
 窓口で 貰ふ 藥瓶の 寒い 影
 窓口は 委細承知の 日 附 印
 窓口で 千圓の 次 恥 かしい
 窓口に ゐる 戀人は 齒で 笑ひ
 窓口で 爪切るころ たまに
 窓口で 人目のあるを 忘れ かけ
 型だけの 返事 窓口 何か 書き
 窓口へ 髭だけ 見える 曇つた 日
 窓口へ 疲れた お錢 また 出され
 生活の 程度 窓口 から 見られ
 窓口で 押す 實印 と なり に けり
 窓口で 親不孝 と もなる 金の 嵩
 窓口へ 呼ばれる 妓の 卷煙草
 借れる だけ 借る 窓口 馬券 買ふ
 窓口を のぞく 眼鏡の さびしげ

正胤 澄風 同 童 曉 幽 變 人 蒼梧樓 新水 由布 新水 新水 新水 新水 龍城 鮎美

窓 口

森 雞 牛 子 選

「人の句」みんな先生云ふので、女將もさう呼んでゐるだけであら。衷心からの尊稱ではない。お勘定は先生をお連れしたお客様から。
 「地の句」是非女將が捌ければならぬ問題が起つて來たのである。商賣に忠實な女

主人公の責任感念が働いてゐる。
 「天の句」女將の知才なささ、みづかささが同時に描き出されてるやうな句であるスカンペンになれば、其見どころも忽ち急轉直下して、冗談に叱られた親しみも昔の夢と消え去るであらう。

科 兒 小 ・ 科 內

院 醫 洋 漢 和

一 成 川 谷 長 士 博 學 醫

目 丁 一 橋 堀 長 區 南 市 阪 大

番 八 八 一 四 南 話 電

各地柳壇

い の ち あ る 句 を 創 れ

規 清 投 稿

- 一、用紙はなるべく原稿用紙のこと
- 二、文字正確明瞭に記載のこと
- 三、開催月日及場所記入のこと
- 四、締切は毎月廿五日とす
- 五、投稿先は本社宛

本 社 新 春 句 會

一月九日 於朝日新聞社三階大廣間

兼題「彼氏」「生字引」前號發表

八十島 杜若氏選

金儲意外な人に聞かされる 一若氏選

輪をかけて人の儲けた話なり 三四郎

變人で通つた父はよく儲け 斗風

金儲父もひき役買ふて出る 同

朝刊の中へ 折込む金儲 かほる

十 秀

今に儲かるなご空地見て通る 東魚

儲けてる聲がせわしい電話口 朔風

卒業がまてず金儲のけいこ 南濃路

母だけが儲かる話を聞いてくれ
金儲たんく 趣味に遠ざかり
厄年も忘れ 必死の金儲
金儲淋しい過去をもつ男
金儲笑ひの中で見得を切り
金儲してゐる奴と氣が合はず
胸算で出来る儲の素晴らしさ

五 客

金儲 小さな男にして終ひ
金儲 叔父の秘策ははづれ勝
儲話たんく 聲が低くなり
吹けば飛ぶ男できつい金儲
金儲 日本國が 狭く見え
(人) 金儲 伊豆で ゆつくり考へる
(地) 始めてのサラリー嬢がパスに
(天) 懐手 孫六 張りの夢ばかり
席題「宵戎」 本田溪花坊氏選

宵戎 市内のパスはみんな来い
宵戎 羽織の紐がごつかゆき

今 艸 雨 今 艸 雨
珍竹林 子 鬼
ライト 聞 路
散仙洞 遠見路 一 瓢
豆 秋 眞 砂
花戀坊 春 水
艸 人 木

笹賣の聲がまともな宵戎
宵戎 乗換券を無駄にする
宵戎 小雨怖れの足ばかり
宵戎 大阪の夜のやばらかさ
群集の一人が 目立つ宵戎
高下駄で無事に参れた宵戎
宵戎 あした賤る 氣で呑んでる
年寄が 歩る いてもどる 宵戎
風呂の 沸く 間を ちよいさ 宵戎
宵戎 よりも 相場が 氣にかいり
宵戎 吉兆の 笹濡れてゐる
宵戎 物足らぬ まい 笹を持ち
惚れたの 奴と 宵戎 以後會はず
土曜日の 雨が きれいな 宵戎

席題「下戸」 櫻井 六葉氏選

父の下戸子の下戸金はためてゐず
新 社員 當分 下戸の 氣で 勤め
珍藝へ 下戸の手並を見せてゐる
下戸と 言ふ 事で 幹事の 役を 背負ひ
中裁の 下戸 兩方 を 持て 餘し
下戸の 前手 持 不沙汰に 老校 ぬる
二日 酔下 下戸へ 盃 ならんで
見渡せば 下戸へ 盃 ならんで
下戸 一人 餅など 焼いて 留守 居番
鐵瓶の 艶を 賞めるは 下戸の 世辭
サイダー 下戸は 後から ついて 行き
十二時 が 近づき 下戸の 耳へ 入り
友情を 知らぬ 男に されて 下戸
當分の あいだの 下戸 になり けり
よく 歌ひ 下戸 さかづき に くる なり
下戸 ば も う 家 が 戀 しい 顔 になり
下戸 ならば 折目 正しい 松の 内
醉眼へ 救世軍 は 下戸 ばかり

無 煙 か ぼ る 珍 竹 林 丹 路 丹 路 丹 路
白 柳 子 四 郎 秋 南 濃 路
無 煙 聞 路 無 煙 聞 路
斗 聞 路 無 煙 聞 路
喜 山 喜 山 喜 山
鈴 家 鈴 家 鈴 家
東 魚 東 魚 東 魚
玉 政 玉 政 玉 政
愛 二 愛 二 愛 二
朔 風 朔 風 朔 風
彩 秋 彩 秋 彩 秋
一 瓢 一 瓢 一 瓢
亂 秋 亂 秋 亂 秋
豆 秋 豆 秋 豆 秋
龍 城 龍 城 龍 城
翠 陽 翠 陽 翠 陽
遊 平 遊 平 遊 平
珍 竹 林 珍 竹 林 珍 竹 林
喜 山 喜 山 喜 山

ホーナスへ君と二人の気が揃ひ 岩石

川柳社 松山句會 (松山)

十二月十日 於晴朗食堂

酒井大樓 報

河豚 十二月

お隣も勘定がすむ十二月
十二月舞子の聲へ氣の尖る
自轉車のベル追立てる十二月
十二月三十一日借りに出る
掛取に旦那自から十二月
来年の希望も有つて日記買ふ
河豚料理仲居看視をしてる形
河豚料理自信の友へあぶなかり
こいのなら安心をしる河豚料理
鱈酒の味知つてくる 四十代

川柳社 廣鐵川柳句會 (廣島)

十二月一日 於廣鐵俱樂部

久米雄 報

方言、落し主、障子、呼鈴、居残り
方言の意味を子供に教へられる
國訛出て来て、皆に笑はれる
方言をすまほに云ふて、い、嫁御
夜の膳子に方言を教へられ
落し主ついでに落りに寄る氣なり
ラツシユアア落した人が叱鳴られる
星州
禮よりも顔を見られる 落し主
呼鈴に出て人影のないにくさ
方言で話せる故郷の友が来る
呼鈴へ来て挨拶を口ごもり
獨り身の軽さ障子に雀鳴く
呼鈴を押せばテリヤに吠えられる

川柳社 廣鐵川柳句會 (廣島)

十月十四日 於廣鐵俱樂部

久米雄 報

交叉點、夢、留守、松の内、姉妹
孫に手をひかれて 渡る交叉點
交叉點昨日の風さちさ違ひ
ストツプのあちらに商賣敵ある
肩組んでゐたのが解ける交叉點
生酔ひがすこはみ出る交叉點
善人の氣持でゴアの足を出し
交叉點事故のあつたへ西陽する
釣竿の重さに夢がさめるなり
辻褄の合はぬさころが夢らしく
朝の膳うなされたわけ子が話し
下女の戀はかない夢さあきらめる
逆夢を祈る足取さへ鈍し
母の文夢見のことも書き添へて
大仰に娘は母の夢を聞き
若夫婦留守はテリヤに任せまき
留守番のお賃へ財布開けられる
花嫁がそこら四五軒留守にさせ
留守居して作るピラフキ黒く焦げ
御留守居し女の客に落着かず
配達夫留守らしいなことう一度
尼寺の留守を鶏いゝ氣持
松の留守猫は二度分あてがはれ
松かさり雀が来ては種をむしる
松の内誰か雪に來た氣配
松の内誰か雪に來た氣配
碁石持つ手に餘裕あり松の内
姉妹のけんかを分ける 飴二つ
姉妹も共に嫌いで母淋し

阪大川柳會一月例會 (大阪)

一月二十五日 於惠濟會館三階ホール

丸島利生 報

足袋、おため、雜、霧島温泉、總辭職
地下足袋の末を樂しむ共嫁 柳秀
脱ぎ棄てた足袋は子供と思はれず
足袋一つはくにも女しなが要り
エキストラ足袋だけ見せて暮が下りたけを
當番で汚した足袋を叱られる
子澤山片方許りの足袋が出る
文敷を替へに女房出かけた
盛装(足袋の汚れがよく目立ち
地下足袋の晝病人に羨まれ
足袋だけ更へて女將は入つて來
薪くべて足袋つぐ母の愚痴を聞き
バートナー(纏ひ付いてる白い足袋方
子の怪俄に門へ飛び出る足袋はだし
白足袋の叔父の如才のない意見
干した足袋收穫のやうに扱はれ
落籍されてベツチンの足袋はきなれる
窓枠の足袋へ舍監の眼が光り
ベツチンで社長ゆつたり下邸
花袋の足袋は氣高き白さなり
白足袋で會へば葬式か言はれ
孫の足袋持たせられての散歩なり



柳界展望

全園川柳界のこころ、各地川柳家の一舉手一投足をこの展望欄ですくわける様にしたい。皆様の御通信を歓迎する。

催し

- ▲川柳雜誌社二月例会は二月二十三日夜誓得寺に於て開催、當夜珍らしく麻生霞乃女史の「街の氣象學者」の講演あり。眞摯なる作家一堂に會して如月の夜は楽しく更けて散會した。
- ▲住友金屬鑛業所親友會(尼崎)の二月例会は十日夜開催路郎師出席さる。
- ▲京都川柳社事務所主催で故樂山、無折所藏道愛品即賣會を二月一日午後一時から仲源寺で開催し引續き同夜例会を催された
- ▲川・雜鶴町支部の二月例会は六日午後六時ライト君の宅で開

催されたが、この夜豆秋、結美の二君が参加され、盛會だったの由。

▲川柳京橋吟社(東京)では一月廿九日夜「あさだ」に於て初同人會を開催された。

▲北大阪川柳社の二月例会は十日夜大阪細菌研究所に於て開催された。

▲みすか川柳社(今治)では二月六日例会を開催。

▲大阪川柳社(大阪)では二月廿日端の坊に於て故岡田三面子博士追悼句會を營み、この日宮尾しげを齋伯から同氏の筆になる故人の肖像繪葉書を航空便で寄賜ある等、盛會だった。

- ▲しなの川柳社(松本)では二月十三日松三波で例会を開催さる
- ▲二月十八日廣島鐵道俱樂部で九天、久米雄雨君によつて二月例会を開催されたが、この日、最近今治から榮轉された枯佛君も出席し、盛會だった由。
- ▲銀座の伊東屋七階に於て阪井久良俊翁梅花展が二月八日から十一日迄四日間開催され盛會だったとの事。

▲二月十七日矢野虹ノ鷹君(今治)を松山へ送る會を開かれた

▲番傘川柳社主催の川柳趣味展覽會は大坂三越七階催場に於て二月九日から十四日まで開催、連日盛會。尙十一日八階ホールで「川柳に關する講演會」を開催さる。

創刊と廢刊

▲しなの川柳社(松本)から一月廿日「川柳しなの」の第一巻第一號が發刊された。御發展を祈る。

消 息

▲福田山雨樓君(横濱)は二月三日名古屋驛新築落成式に出席

柳誌要目 (一月號)

川柳語雜考(一)

額原 浪藏 (三味線草)

幸堂得知翁の改作句

水木 眞弓 (三味線草)

誹諧玉みぎ

森 東魚 (三味線草)

鑑賞十句(四)……柳樫初篇から……

櫻井 六葉 (梅 鉢)

「笠がつるむ」に就いて

竹重 虚心 (むさしの)

新生命主義への出發——既成的な

新興川柳の清算——各詩派の檢討

田中五呂八 (水 原)

川柳作家の教養問題(一)

川上 日車 (水 原)

寛十窟談義

蛭子 省二 (湯の村)

人間學としての川柳をつくる

「若き時代」協力せよ(時評)

品川 陣居(川柳きやり)

されたが水車君に逢はれた由、尙跡途松本の民郎君、湯田中の紫痴郎君を訪はれ、川柳村へも立寄られたるのこゝ。

▲本誌マンガセクシヨンの小川武先生(大阪)は二月一日東上一年ぶりて銀座の空気を吸ひ、SSK漫畫研究部の伊藤瑤天君に逢はれ、五日歸阪された。

▲橋本縁雨君(大阪)は二月八日から神經過過のため臥床中、一日も早く御全快を祈る。

▲松本文太君(石川)は近く個人句集を刊行される由。

▲大島瀟明君(川協名譽會員)は一月下旬零下三五度のハルヒに赴かれ、三十一日は新京に二月三日大連に歸られた由。

▲矢野蛇ノ鷹君(今治)は松山へ轉住を機に句集を刊行。

▲草薙川柳社(名古屋)では一時投句先を名古屋市南區野立町七畝圃、稻垣正穂君方に移された。

▲田村九年坊君は柳誌「京」の同人となられた由。

▲山本葉光君(大阪)から二月十九日中村篤治郎三周年追善興

行や、「新しき土」の映畫を見られたさいふ通信に接した。病床十八年にこのよるこびのあつたことを共によるこびたい。

▲第四回全國川柳交駱大會は名古屋に於て四月十八日開催されるが、その挨拶のため二月七日大窪文芳君來社、路郎氏と懇談し、同日二三の川柳社を訪問して歸られた。

▲井上信子女史主宰の「蒼空」は近く「川柳人」と改題して發行される由。

▲市場没食子君(大阪)は一月十五日病氣のため選信診療所に入院されたが二月廿三日退院の運びとなる。

慶 弔

▲西いわを君(大阪)の宅では女子出生。お喜び申上げる。

▲氷原川柳社(北海道)主幹田中五呂八君は病氣療養中二月十日午後十一時半永眠された由、謹しんでお悔み申上げる。

▲富士野鞍馬君(東京)の刀自は八十九歳の高齢を以つて二月十六日午前六時永眠される。謹しんで哀悼の意を表する。

改 號

▲田中欽乃君は鳥雀▲坂井胤盈君は正風

轉 居

▲中西おさむ君(大阪市東成區北生野町二ノ廿八)▲林幹君(長野縣小縣郡長久保新町)

▲京都川柳社事務所(京都市西木屋町四條下ル辻井京二君方)

▲綿谷摩耶火君(京都市杉並區天沼一ノ八八)田中彩秋君(大阪市旭區中宮町五〇〇)

其 の 他

▲前田雀郎君(東京)は近く「川柳講座」を刊行されるため二月九日西下されたが、この刊行は全六卷及別卷一冊に亘つて諸大家が執筆される筈で、その完成の日をまたれてゐる。尙「川柳講座」刊行事務所は京都市京橋區銀座西五ノ三ヒツツヤ階上に設け只今その準備に忙殺されてゐる。

▲川村花菱君は(東京)雜誌「奥の奥」三月號に「川柳に見た女の姿」を執筆された。

柳窓漫筆

和田天民子(川柳俱樂部)

川柳への發展(六)―上代文學への一考察
石崎 柳石(川柳みずか)

川柳指導講座

講師 塚越正光先生

課題 「ラサカ」一人一句
締切 三月末日

投稿 本社宛「川柳指導講座句稿」と明記する事

古句研究の過去を顧る

花岡 百樹(一番 愈)

内容主義か形式主義か

木村牛文錢(川柳ビル)

☆句會のお忘物

二月二十三日夜の川・雜二月例會場誓得寺(襟巻(一筋)が殘されてありました。お心當りの方は永田里十九方「川柳雜誌社俱樂部」(電南七五五一番)へお問合せ下さい。



編 縦 横 輯

▼ホントに寒くならないうちにソロ／＼春めいて来た。ボカボカするやうになつたら、吟行でもしたい。

灰色の街の變な壓力から近れるためにも吟行は是非やりたい「番傘」も「三味線草」と「昭和川柳」も「川柳雜誌」もみんな仲よく、お手々を繋いで春の野邊を散策するのも悪くはないぢやないか。

▼本號から一日發行に變更した従つて總ての原稿の締切を早めたいので、寄稿家諸氏も、編輯局の躍進振りに歩調を合はせて頂きたい。締切間際原稿は挿畫など入れたいと思つても入れ

られない憾みがあつて編輯子の腕を揮ふ餘地がなくなる。

▼二月七日の夜に、本社の樓上で不朽洞會を開いた。そしていろんな協議をすゝめた。不朽洞會員は別項「社關係の人々」の欄に發表の諸君である。今後、本社の句會は不朽洞會で面倒を見ることになり、編輯にも參與することになつた。勿論これまでも參與はしてゐた譯であるが改組後緊急の事が多かつたので自分がケン／＼事を運んで事後承諾の形式を採つてゐたのである。

▼「一路集」の懸賞募集は廢止することにした。

▼雑文欄が、も一つふるほない雑文ラン華やかなりしころの素人、亂駢、町二等の熱を想ふ。

▼扉に入れる句會を二月七日に開いた。題は「街に住めば」だった。山雨樓君や水車君や柳次君にも知らしたが本號の間に合はなかつた。

▼神戸支部の幹事をしてゐた喜

多春秋君が一身上の都合で突然退社した。次いで西村明珠君も退いた。春秋も明珠も自分が命名した人達だけに自分としては一種の寂しさを感じるが他日必ず復活してくれることを期待して暫く秋を待つことにした。従つて神戸支部の幹事の後任については暫く考慮することにした

三月の本社句會は
六日の午後六時半

會場誓得寺（大寶寺町）
兼題「一泊」「夜櫻」

▼新興柳壇のためハツラツたる筆陣を張つてゐた氷原の田中五呂八君が、二月十日に亡くなつた。

曾て自分が小樽へ出向いた時にけ新興、既成共に手を繋いで歓迎句會を開いてくれた五呂八君の訃を知つては黯然させざるを得なかつた。近年休火山状態にあつた五呂八君が「氷原」の新年號では再び論陣の鋭鋒を見

せてゐたし、その編輯後記では今後の飛躍すら仄めかしてゐた位であるから、こんなに急激に仆れやうさと思つてゐなかつた。謹んで哀悼の意を表する。

▼二月二十三日の夜、誓得寺で句會を開いた。折悪しく雨のために出足が遮ぎられたが、東魚水府、鳥語、溪花坊、雞牛子君等の來援もあつて和やかな句會を開くことが出来た。久振りに葎乃が演壇に立つた。病後で息苦しくなるのを案じてスロースピーチではあつたが、女性川柳家の句を引例して女性の立場を語つた。當夜は里十九、新水、豆秋、おさむの諸君が幹事として熱心に世話をしてくれた。

▼紙屋の値上げ、印刷屋の値上げ、製版屋の値上げは困つたものだ。ソレで詩代の値上げでも出来たらいいが、そう出来ぬところに雜誌經營の悩みがある。

▼仕たい事、云ひかりで澤山あるが、云ふらばないので、僅づいでも不言實行を續けやう。(略)

川・雜・案・内

六號活字十四字體三行金五十錢、一行増すこと
 別に金十錢（但し前金切手代用可）その他
 改題、改題、句會案内、柳書廣告、その他

川・雜・句・箋

「川柳雜誌」への投句は新らしく出来た樹形の美しい投句用箋をお用ひ下さい。

句の書き心地もよいし、選者が選句されるのにも、便利で句の見損じもなく相方に好都合であります。自分の句を尊重される意味からでも御使用をおすすめいたします。送費は本社で負擔いたします

八十枚綴 一冊 金十五錢
 同 二冊 金廿五錢
 御申込は川柳雜誌社へ
 切手代用も可

路郎先生染筆

路郎先生筆、掛軸、横額小物、短冊を川柳家に限り左の通りで頒布致します

軸箱入 二拾圓・額 二拾圓
 小物 五圓・短冊 參圓
 御申込は前金で發行所へ

合本特賣

川柳雜誌の合本第二巻より第十一巻まで

各一卷 金壹圓五十錢
 第十二巻及第十三巻 金參圓
 送料大阪市内 一冊廿四錢
 市外 一冊廿六錢
 御申込は前金で川柳雜誌社へ

後の葉柳を頒つ

大正八年に出してゐた「後の葉柳」の残本が僅かばかり出て来たのでお頒ちします。日車、牛文錢、路郎の三氏の句しか載つてゐない樹形四頁もの全三部で十錢、二錢切五枚お送り下さつてもよろし。

川柳雜誌社宛

「川柳雜誌」

創刊號より十巻迄
 某氏の所有、希望者に安價に譲る
 （姓名在社）

殘本分讓

川柳雜誌の殘本が少數宛ありますので、左の通りで分讓申上ます

第二巻より第三巻迄 十五錢
 第四巻より第十二巻迄 一冊二十錢
 第十三巻 一冊二十錢
 （送料一冊一錢）
 御申込は前金で川柳雜誌社へ

句會案内

本社句會案内御希望の方は左記へお知らせ下さい。

大阪市南区疊屋町六
 永田里十九方
 川柳雜誌社俱樂部
 電話南七五五一番

川柳を作る人、愛好する人の必讀誌

川柳俱樂部

毎月一日發行
 一部廿錢・送料一錢
 東京市牛込區拂方町一四
 川柳俱樂部社

川柳研究

川上三太郎・大谷五花村共著
 一冊金廿一錢
 （郵税共）半年金一圓二十錢
 錢（同）一年金二圓四十錢（同）
 異色ある本誌の創作欄を絕對に見逃してはいけません
 見本希望者は三錢切手七枚同封左記へ
 東京市王子區上十條町八五一〇
 發行所 川柳研究社
 振替東京九四〇四六番

川柳きやり

菊判每號七十數頁
 毎月一日發行一部廿五錢
 東京豊島區高田本町二ノ一四
 六八
 川柳きやり社

大阪の古本屋

大阪市道頓堀筋日本橋南詰東入濱側

天牛第二書房

電話南(75)一五六三番
 振替大阪七一五四三番

高尾書店 櫻橋店

電話北七〇〇七番

大阪市西區南堀江通一丁目

荒木伊兵衛書店

支店 朝日ビル二階専門大店

大阪市南區西清水町八番地

古典籍 一般 石川清和堂

振替大阪七三五八一番

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
 電話南五六一二番

大阪道頓堀

天牛本店

電話南二七四八・二七四九番
 振替 五六六五〇番

趣味の古本屋

尾上菟文堂

大阪市南區墨屋町五番地
 但シ心齋橋周防町東へ一丁目北側

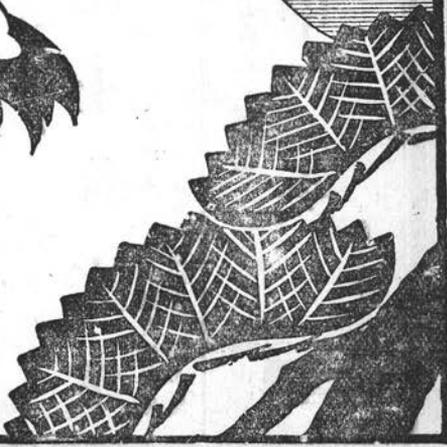
大阪市會根崎永樂町二

中央堂

松本政治

酒 白鶴 清

ハクツル



元賣發 社會名合納嘉

天奉・連大・川仁・城京・戸神・京東・阪大

伊豆椿灰皿ポマード

植物性 五十銭

頭髮のホルモン劑 (コレステロール配合)

フケ・カユミを止め白髪・若禿を防ぎ
 明らかな青年美を創る伊豆椿ポマード

御使用後ごても
 スマートな灰皿
 になる新案容器！

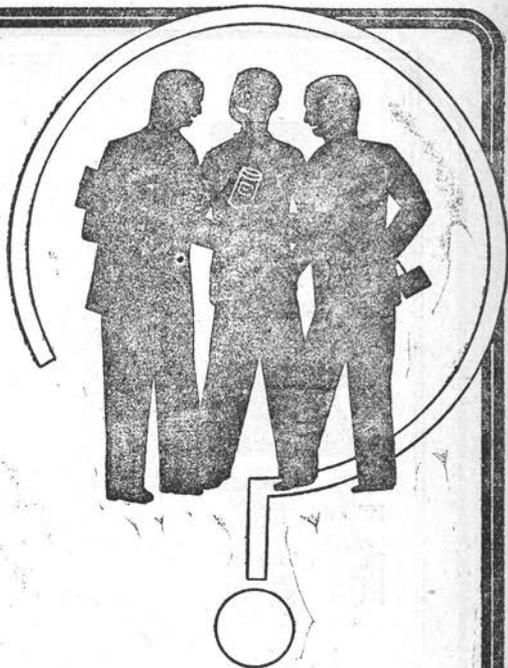


美髪は
 紳士道！



全國百貨店、有名化粧品店
 薬店、小間物店にあり

伊豆椿香油本舖
 大槻彩芳園



胃。酸。過。多。症。

胃 痛、惡 醉

二 日 醉、溜 飲

酒・煙草の のみすぎ

制・酸・鎮・痛・劑

ノルモザン錠

ノルモザン錠は、珪酸アルミニウム（醫家用ノルモザン）を主成分とし之にロートエキス薄荷腦を配した錠劑で、胃酸制止・胃粘膜保護・鎮痛の効果を併有する學理的製劑です。

ノルモザン錠は、胃壁を全面的に防護して、胃液の刺戟を去り、胃酸の過剰分泌を抑制し、胃粘膜過敏による疼痛を鎮め、オクビ、ムネヤケ、胃のモタレ、キミヅ等の症狀を除いて安全に治癒に導きます。

【價格】 一日分（三錢） 三日分（五〇錢） 約一週間分（二圓）
 十六日分（二圓） 一ヶ月分（二圓五〇） 二ヶ月分（五圓）

各地藥店にあり

發賣元 大阪市道修町 株式會社 武田長兵衛商店

菊正宗

宮内省御用達

株式會社

本嘉納商店

推 奨 士 博 學 醫 林 植
 査 監 士 博 學 醫 瀨 片

錠 ムーユシルカダブ

安産

母性愛の達成へ

母性愛の發露たる妊娠は眞に女性にとつての重大任務であります。更にこれを達成せしめることはワダカルシユームの使命であります。即ち母体と胎兒の保護榮養に任じ、悪阻期を安全に経過せしめ、偶發する諸病を未然に防ぎ、子宮の收縮をよくする爲め安産せしめ、からお産の守護神として御信任を頂いてゐます。更に授乳期には、母乳を豊富にし、乳質を改善する外、母体の容貌、毛髮、齒牙の悪化を防止し、乳兒も随つて健やかに育成されますから、凡ゆる女性を朗かな圓滿な家庭の人とします。

片瀨醫學博士述「安産のために進呈

のために

代時ムーユシルカ
 てし設建を

茲に二十年、幾十萬の妊産婦諸姉が、「ワダカル」の偉力を禮讃せられつゝある事實と、我國カルシユーム學界の泰斗、大阪醫大教授片瀨博士の、二十年一日の如き熱意と努力により、不滅の城域を築き得ました事は、敝店最大の誇とする處であります。

「安産！安産！安産のために
 「ワダカルシユーム錠」



店高助卯田和 町修道坂大

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は川柳人協會の役員に限る。

▲各地會報は牛紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく階書「川柳雜誌原稿」

ま封筒に朱記の事
▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信封封入の事。

募 集

第十四卷 第六號課題

四月一日締切

(十句以内)

袂 榎田 珍 竹林 選
食 堂 永田 里 十九 選

第十四卷第七號課題

五月一日締切

(十句以内)

退 社 前田 雀 郎 選
夫 人 住田 亂 耽 選

每 號 募 集

近作柳樽(雜吟)麻 生 路 郎 選

各地柳壇(會報)

文章(評論研究感想吟行漫文漫畫)

價 定

一 部 金三十錢
半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
一箇年前金(特輯號共)三圓六十錢

料 告 廣

本誌への廣告に就いては發行所へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○謄代受領は送本によつて御承知願ひます○送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金下さい○御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます。但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます○御注文には何月號よりご御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十二年二月廿五日印刷
昭和十二年三月一日發行

第十四卷 第三號
(毎月一回一日發行)

禁 編輯兼發行印刷人 麻 生 幸 二 郎

無 發行所 大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

斷 發行所 川 柳 雜 誌 社

轉 電話天下茶屋二五七九番
大阪穴阪七五〇五〇番

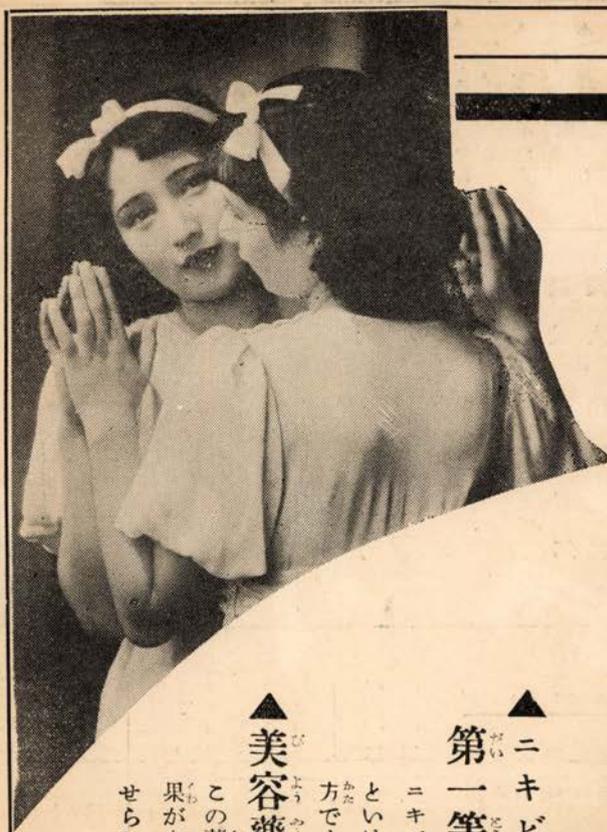
支 社 東京市蒲田町女塚町二〇三
川柳雜誌社東京支社

店書捌賣

(大阪)大賣捌大賣書店 參文社 明文堂 其他 市内 各書店
(東京)かん東京堂かん嚴松堂やう吉岡書店あき玉森堂あき紀伊
國屋さん三味堂(紳士) 米田、寶文館(函館) 石塚(京都)
三宅(名古屋)靜觀堂

にきび
とり

美顔水



▲ニキビ吹出物に
第一等の良薬！

ニキビ吹出物ふきでものにこれ程よく効く薬はない
といはれ 種々な薬や方法ほとで失望しうぼうされた
方かたでもこの薬の効能くつねいには満足まんぞくされます。

▲美容薬びようやくとして

この薬は美容薬びようやくとしても非常ひじょうに優すぐれた効
果くわがきり男子方だんしがたにも婦人方かじやうがたにも廣く賞用せうよう
せられてゐます。

大正十三年三月三日第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和十二年二月二十五日印刷納本 昭和十二年三月一日發行

川柳雜誌

(第一五八號)

定價金參拾錢

送料壹錢